

# INMP Newsletter No. 16

September 2016



INMP ニューズレター日本語版は、「国境なき平和のための翻訳者団」の谷川佳子さん、幾波素代さん、竹田敦子さん、寺沢京子さんの協力を得て翻訳したものを、山根和代 INMP 執行理事と安斎育郎同諮問委員が編集したものです。

## カンボジアのための平和博物館

### カンボジア平和紛争研究センター 平和博物館チームリーダー ニキ・シンガー

カンボジアは、内戦や集団虐殺、外国軍による占領、今も国を苦しめ続ける地雷という遺産など約 30 年もの年月を切り抜け、素晴らしい復興を遂げてきた国です。暴力はその一部にすぎません。カンボジアは、現在の安定した相対的平和に貢献してきた多くの平和構築イニシアチブや平和活動家らの故郷です。特にクメールルージュに関する紛争が注目されていますが、そういった暴力の中、人々がどのように切り抜けてきたかはあまり知られていません。

前へ進む願いとは、過去を議論することでも、なぜどのように紛争が起こったのかを理解することでも、若い世代に国が進むべき姿を教育することでもありません。約 7 割の国民が 30 歳以下という国で、今ある平和と安定を保つために過去を十分理解している人はどの世代にもいないのです。

カンボジア平和博物館の構想は、カンボジア国民が戦争と平和を深く理解し平和へ貢献できる選択ができるよう、平和の文化を推進することです。人々が過去の記憶を整理して共有、そして未来への希望を共有する場となり、訪問者に平和の文化へどうすれば貢献できるのかを考えさせる場となるでしょう。その選択の理由など紛争の力学への深い理解を通し、カンボジアの新しい世代が平和的未来を維持する準備となるでしょう。

非難ではなく、過去を理解するために、紛争の周期を探求する展示を行います。過去の紛争に焦点をおくことなくどのように歴史を語るができるかなど、カンボジアが抱える大きな問題を熟考する場となるでしょう。恐怖を感じずに実際の経験を話すことのできるカンボジア人などいるのでしょうか？そうした省察の安全な場所を作ることで、過去を理解し、カンボジアが二度とそのような暴力を経験せずにいられるようにするのです。ソス・プライ・ガームによる論文「*Preventing future genocide: A vision for a peace museum for Cambodia* (2009)」は、[平和紛争研究センター](#)にて入手可能です。





カンボジアの平和と紛争の全体像を  
学生たちに語る、明確なビジョンを持つ  
平和博物館のソス・プライ・ニャム

平和紛争研究センター(CPCS)は、アジアにおける持続可能な平和を発展させるという総合的な目的をもって暴力的紛争への戦略的介入を強化することを目指すカンボジアの組織です。カンボジアの平和博物館は、約10年に渡るCPCSの夢でした。博物館は、歴史的寺院であるアンコールワットに近いシェムリアップに建てられます。シェムリアップを選んだのは、観光業界のおかげで便利になった利点を生かしつつ、地元大学の9か所のキャンパスに通う学生たちのためでもあります。プロジェクトの現在の状況は、CPCP がカンボジア政府とともに博物館の予定地を調査しています。次は、コンセプト設計を展開した建築コンペや大規模な募金キャンペーンを行います。博物館の展示は、平和史研究、大学生のための平和教育計画、1991年のパリ平和協定25周年を記念した展示の計画などを通して作られています。CPCSでは、米国のパートナーであるEast West Management Instituteを通じた寄付を受け付けていますが、50(c)(3)の寄付税控除を設けています。博物館や寄付について詳しくは[こちら](#)をご覧ください。(※注:50(c)(3)は「免税非営利公益法人」)

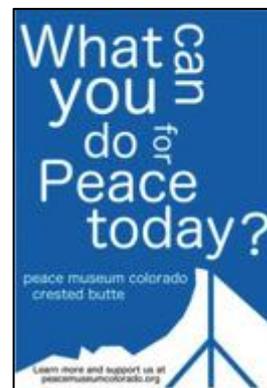
## コロラド平和博物館

ウィーン平和博物館の創設者であり活動的なINMPの支援者であるリスカ・プロジェクトは、彼女の故郷であるクレストッド・ビュートにコロラド平和博物館を造るイニシアチブを取っています。標高3700メートルの山

の名前に因んだこの小さな町は、近年、米国でナンバーワンのスキーの町に選ばれました。この人口たった1500人の町はまた、スノーボードやマウンテン・ハイキングなどのアウトドアの人気の観光地となっています。



コロラド平和博物館主催のピースウォーク



資金を集めて博物館を始めるため、7月4日の独立記念日に開催したピースウォークは「華々しく成功」し多くの観客を魅了しました。ウィーン平和博物館の周りの街頭で行われた平和の英雄を展示する想像力に富んだ「平和の窓」もまた、クレストッド・ビュートで再現され、50人の平和の英雄と多くの地元の人々が展示されました。詳しくは[こちらをクリック](#)してください。リスカ・プロジェクトに直接連絡を取るには[こちらをクリック](#)してください。また、コロラド平和博物館事務局長エリーゼ・ポップへは[こちらへメール](#)をお願いします。

## ロンドン平和博物館 2018年11月開館

ロンドン平和博物館プロジェクト共同創業者  
ロッド・ツイーディ



第一次世界大戦終戦 100 周年を記念し、ロンドン平和博物館を2018年11月開館するという心躍る計画が進行中です。この博物館では、ロンドンの極めて豊かな平和構築と運動の歴史を記念します。1816年6月14日に設立されたロンドンの不変的で普遍的平和振興のための協会(200年前に作られた世界初平和博物館のひとつ)から、W. T. ステッド、バートランド・ラッセル、シルヴィア・パンクルスト、ディック・シェパード、ジョセフ・ロートブラット、ブルース・ケント、ブライアン・ホー、ジョン・レノン、ベン・グリフィンなど影響力のある人物の先駆的な平和活動に至ります。この博物館は、ロンドンの平和活動史の資料や遺物の永住の地となり、人々が今日の平和構築を行うために必要な情報や技術などの資料を収め、非暴力と紛争解決の促進を通して戦争のない未来に向けて若者を動かすために役立つものとなります。批判的思考法の開発と多角的視点の支持、暴力と不当、不公平間の関連性の探求などが博物館の主な目的です。

ピーター・ヴァン・デン・ドゥンゲンが言うように「平和のための葛藤の物語は、行動とドラマ、勇敢さに満ちて」おり、ロンドン平和博物館では、そのやりがいのあるダイナミックな設備や展示を通し、また地元のコミュニティと歴史に創造的に関わり、これを具体化したいと考えています。

ドン・マッカリン、ピーター・ケナード、マーク・ウォリンジャー、ダミアン・ハーストなどロンドンに拠点をおく多数の有名アーティストや写真家によるオリジナルの作品を収蔵したいと思っています。展示や情報、メディアシステムなどを共有し、ブラッドフォード平和博物館、そして世界中の平和博物館や平和関連施設と密な連

絡に取り組んでいきます。ロンドン平和博物館の教育的目標は、教育や学び、奉仕活動を通し、若者たちが平和的世界をもたらすスキルを身に着けるようになることです。当館は、ロンドンの有数のアーティストや教育者らとともに想像力と示唆に富む場を作り、そこで協力と相互依存、紛争解決、多様性の見解を探求していきます。当館について詳細は[ウェブサイト](#)をご覧ください。

このプロジェクト開発の支援、資料の寄付をしてくださる方はご連絡ください。当館では、博物館で働いたことのある方、大規模のプロジェクトや資金集めに関わったことのある方、また単に平和に興味があり21世紀の平和を再考し問い直すこの素晴らしいプロジェクトに参加したいという方を募集しています。詳細は、ロッド・ツイーディまで[メール](#)をお送りください。



## ミーダー平和のヒロイン博物館（ドイツ）

### アンナ・B・エクシュタイン

ヨーロッパを破壊した三十年戦争(1618-1648)の直後に見られた平和の伝統を守るため、1982年、小さな町ミーダー(ババリアのコブルク近郊)に平和博物館が開館されました。博物館では、1651年以降毎年行われる終戦と平和復興記念の歴史を文書化し展示しています。365回目の感謝祭(*Friedensdankfest*)は8月21日に行われました。平和復興の例祭を絶えることなく長期間同様に続けているのは、アウグスブルクのみです。また博物館では、コブルクで生まれ死去した地元の平和のヒロインであるアンナ・B・エクシュタイン(1868-1947)にもスポットを当てています。1884年、彼女は米国に移住し教師となりました。1890年代には、

ニューヨークからボストンに移ったのち、卓越し尊敬される平和活動の一員となりました。ボストン平和協会に属し、アメリカ平和協会の副会長として年一度の世界平和会議に代表として何度も出席しました。



エクシュタインは、第二回ハーグ平和会議(1907)の議長に提出した国際調停促進を強く促す 100 万もの署名を携え陳情を行ったことで有名になりました。そして、1915 年に予定されていた第三回ハーグ平和会議(世界大戦のため開催されなかった)のために 1 億人の署名を集めるという究極の目標のために世界周遊の旅に出ました。また、平和対談のためアメリカ人女性とドイツ人女性とともにドイツ全国で講演しました。1913 年、ノーベル平和賞にノミネートされました。コブルクの公園とミーダーの学校のひとつは、彼女に因んだ名前が付けられています。スウォースモア大学平和コレクション(フィラデルフィア近郊)にある彼女の膨大な数の日記が、ミーダー平和博物館の創設者カール・エーベルハルト・スペルによって翻訳されました。約 30 年前、翻訳のため日記のマイクロフィルムが彼のもとに送られました。それ以来彼は、数えきれない時間を費やし複写、翻訳という大変な任務にあたりました。

8 月 18 日、ついに翻訳され挿絵で飾られた 3 冊の厚い冊子を博物館に提出することができました。この素

晴らしい平和教育者であり活動家のことを多くの人々によりよく知ってもらいたいという奉仕活動であったのです。



「平和博物館の友」のヘニング・シュスター(左)にエクシュタインの日記を手渡すカール・エーベルハルト・スペル(右)

また、コブルクにある地元の図書館とエクシュタインが通っていた聖モリツ協会にも日記が贈呈されました。元牧師であったスペルは、平和と自由を信じコブルクとドイツとそして全世界にもたらしたビジョンを讃えています。彼女は古い考え方を捨てて国際連盟創設に貢献した新しい考え方を提供しましたが、それは国連憲章の中に見ることができます。この素晴らしい業績にカール・エーベルハルト・スペル氏に心からの感謝とお祝いを述べたいと思います。彼は、エクシュタインの重要な情報を明らかにするための INMP 役員のジェラルド・ロスブロクの貢献について謝辞を述べています。地元紙(ドイツ)に掲載された短いレポートは[こちらをクリック](#)してください。

### ベルリン反戦博物館展覧会 「反戦のモニュメント」

6月4日(～10月4日)、ベルリンの反戦博物館(Anti-Kriegs-Museum)で新しい企画展がオープンしました。「平和よ永遠に:反戦のモニュメント(Frieden fuer immer: Denkmaler gegen den Krieg)」と題されたこの展覧会は、80年前の1935年ノーベル平和賞を受賞したカール・フォン・オシエツキーに捧げられていま

す。展示の中には、会の表題の前半のもとになった銘が記された彼の墓所での記念碑の画像があります。当博物館の創設者であり責任者であるトミー・シュプリーは、展覧会を支援したベルリン、ミッテ地区の町長クリスチャン・ハンケ博士が綴った歓迎の言葉を読みました。彼によれば、この展覧会は、ベルリン市民だけでなく来場者にも同様に、高まった認識をもって街の中に多数存在する平和の記念碑を発見してもらうことを促すものです。多岐にわたる平和主義者や戦争抵抗者の心を打つ言葉とともに、そういった場所は平和を維持し強固にせよという警告なのです。自分の周りに、そして、全世界に広がる平和を。



「反戦のモニュメント」のポスター

監督したクリスチャン・バルトルフは、写真や物理的記念物だけでなく絵や引用文、詩といった他の反戦・平和の表現で構成された展示会で、来場者を案内してまわりました。反戦画像には壊れたライフルや結び目のある銃(次の記事参照)の写真もありました。2008年から監督となりこれで14回目の企画展となります。今までの展示会では、例えばガンジーやトルストイ、M.L.キング、ヘンリー・ディヴィッド・ソロー、ダビントラナート・

タゴール、エティエンヌ・ド・ラ・ボエシー、カール・フォン・オシエツキなどがテーマとなりました。クリスチャン・バルトルフは、ベルリンのガンジー情報センターを運営しています。詳しい情報は[こちらをクリック](#)してください。展覧会のオープニングやヴァーチャルツアーは20分のビデオクリップで[こちらから](#)ご覧になれます。

### 結び目のある銃の彫刻家 カール・フレドリック・ロイテルスワルト (1934-2016)

世界で最も有名な反戦彫刻のひとつを制作したスウェーデンの芸術家カール・フレドリック・ロイテルスワルトが5月3日81歳で逝去した。ときに「非暴力」ともいわれる「結び目のある銃」は、銃身が結ばれている大きなレボルバーが表現されている。1980年にマンションの前で殺されたジョン・レノンの事件を受けて作成されたものだ。ロイテルスワルトは、1969年に歌手であり平和活動家だった妻・ヨーコ・オノと既に会っており、平和を題材にしたアート作品を彼らのために制作することを話し合っていた。レノンの死後、オノは彼に作業を続けるよう伝えた。苦しみと怒りのなか、ロイテルスワルトはすぐにレノンや無分別な暴力の被害者たちに捧げるシンボルを創作し始めた。結び目のある銃身のアイディアは、始めから思いついていたと後に彼はコメントしている。「結び目のある銃」は最初、ニューヨークにあるレノンのダコタ・アパートメントの向い、セントラルパークのストロベリー・フィールズ記念碑に置かれた。1988年、同市の国連にブロンズで作ったものがルクセンブルグ政府から寄付された。

スウェーデンに10点、そして世界中のあらゆる場所に、ヴァリエーションも含め30点以上のコピーが存在している。彼が晩年過ごしたランツクルーナには、銃身に二つの結び目がある有名な作品がある。欧州内では、カーン記念館(フランス)、ローザンヌ・オリンピック博

物館(スイス)、ベルリン連邦事務局の公園(ドイツ)、欧州委員会のジャン・モネ・ビル(ルクセンブルグ)にこの彫刻のレプリカがあり、欧州外では、中国や南アフリカにもレプリカが存在する。



1996年ミュンヘンにて「非暴力」彫刻と  
カール・フレドリック・ロイテルスワルト  
クレジット:Istvan Bajzat / picture-alliance / dpa, via  
Associated Press

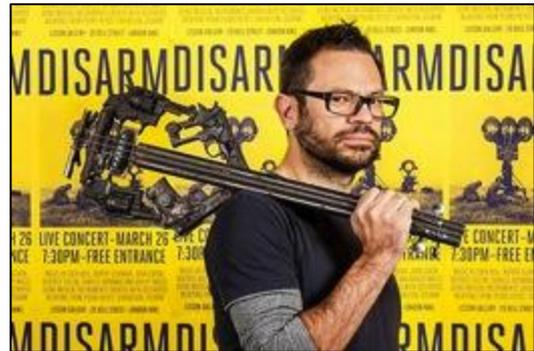
1993年ロイテルスワルトが何人かとともにスイスで作った非営利団体である「非暴力プロジェクト基金」のもと、この彫刻は暴力に頼らず紛争を解決する方法への理解を若い人たちにさせ、また紛争解決に参加させるために使用されている。その目標は、できるだけ多くの学校やスポーツクラブに広げることで、現在、全世界で若者や教師、スポーツのコーチ 600万人が学び訓練を受けている。基金の詳しい情報は、[ここをクリック](#)してください(彫刻の様々なレプリカの画像を見ることができます)。

※出典:2016年5月4日のニューヨークタイムズ紙「結び目のある銃で知られる彫刻家カール・フレドリック・ロイテルスワルト、81歳で死去」、2016年6月10日タイムズ紙「ジョン・レノンの射殺を受け、結び目のある銃を制作したスウェーデンの前衛彫刻画家」

彫刻の画像や場所は、検索フィールドに「Peace sculpture around the world – Reutersward」と入力し、Maripo のサイトをクリックしてください。

## ジャスト・ピース・フェスティバル(ハーグ) ペドロ・レイエス『武装解除』

メキシコ人アーティスト、ペドロ・レイエス(Pedro Reyes)の音楽的インスタレーション『ディスアーム』(戦争ではなく、音楽を作ろう)は戦争と暴力の文化の道具を平和的な芸術や音楽の道具に変えるという想像的かつ力強い実例であった。



2007年のプロジェクトの開始以来、彼は機械演奏の楽器を作るためにメキシコの軍や警察が武装ギャングや麻薬カルテルから没収した武器の残物を使っている。メキシコ政府は楽器を作る材料になる6,700丁の銃やピストルを埋めたり焼却したりせずに、彼の最近の作品『ディスアーム』のために提供した。その楽器はメキシコシティの新しいメディアスタジオ“Cocolab”やミュージシャン・グループの協力で作られている。この演奏装置は前もって準備された構成で音楽コンサートができるようにコンピューターを使ってプログラムされ操作されている。この自動演奏装置の様々な部品は今なおピストルや銃やショットガンであるとわかるが、もはや人を傷つけることはなく、喜びとハーモニーをもたらすのである。



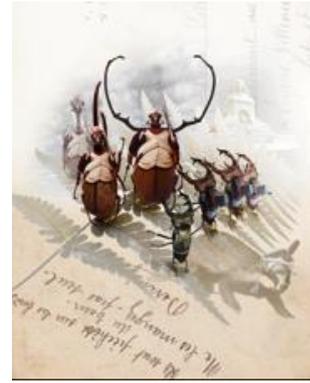
『ディアーム』(武装解除、軍縮の意)は現在ヨーロッパ中である。ハーグのメキシコ大使館の協力で「平和と司法の国際都市」ハーグが毎年国連の国際平和デー(9/21)に合わせて企画するジャストピースフェスティバルでこの音楽的インスタレーションが体験できる。この5日の会期中、平和を祝ってハーグの町中で展覧会、コンサート、討論会、ランニングイベントなどの広範囲で人気のあるプログラムが開催される。『ディアーム』は町の中心にあるPulchriスタジオでおこなわれる。

ペドロ・レイエス と『ディアーム』についての“Turning weapons into instruments(武器を楽器に変える)”という魅力的かつ有益な8分間のビデオは[ここ](#)で見ることができる。

展示会：「傲慢」  
エーリッヒ・マリア・レマルケ  
ピースセンター展覧会  
オスナブリュク（ドイツ）

オスナブリュクにあるエーリッヒ・マリア・レマルケ ピースセンターで8月18日から「傲慢」と題する展覧会が始まりました。ドイツ人の合成写真アーティストハラルド・リュースマンが戦時の人間のふるまいと軍服着用が個々の人間性に与える影響に焦点を当て、これを動物の形態として可視化した作品です。第一次大戦前・戦時中の敵国を獣に模し、自国の好戦性を正当化した視覚的プロパガンダの史料を用いています。リュースマンはこの手法は過去のものではなく今日も戦争のプロパガンダとして使われているとし40の合成写真で20世紀の戦争と動物を使った表現とを結びつけています。

展覧会の題名が戦争を触発する「傲慢・プライド」という人間の根源的弱点に言及し、動物の合成写真を用いてそれを明示しています。動物として描かれた兵士は、ヨーロッパの戦争の世紀を表すナポレオン時代から第一次世界大戦のドイツとフランスの軍服を着ています。これらの軍服は階級制度を象徴し、虚栄心の表現です。この展覧会は11月20日まで開催されます。

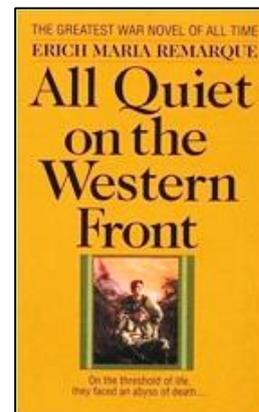


「傲慢」の中の一作品



Erich Maria Remarque  
エーリッヒ・マリア・レマルケ

レマルケ(1898-1970)は小説「西部戦線異状なし」(1929)で一世を風靡し、その映画(1930)は史上最初で最も影響力のある反戦映画の一つと言われます。第一次大戦での参戦体験から平和主義者となり、ナチスが彼の作品を発禁焚書した際にレマルケは祖国を去りました。1931年に彼はスイスのアスコナに近いポルトロンコに家を買いました。



古典的反戦小説「西部戦線異状なし」



エーリッヒ・マリア・レマルケのタボル山荘

このマッジョーレ湖畔にある「タボル山荘」は現在の所有者によって売りに出されたのですが 2011 年、この「記念すべき在外ドイツ文化史跡」を保存しようと委員会が発足し、レマルケの「軍事平和主義」を信奉しこの山荘を 21 世紀の「反戦文化」を促進する国際会議センターにしようとしています。

ドイツ政府、オスナブリュク市、スイスのテッセン州の後援にも拘わらず、資金不足でこの価値ある計画の実現は不可能となりました。詳しくはこちら [here](#) (ドイツ語) へ。展覧会についてはこちら [here](#)、保存委員会はこちら [here](#) へ。

## テヘランピースミュージアム (TPM) イラン

5月18日に行われた式典ではイラン国内の博物館やイラン博物館国際委員会職員が多数集まる中、テヘランピースミュージアムは「文化歴史遺産紹介」の部門で年間最優秀私立博物館に選ばれました。

5月9日～30日には展覧会「My Face for Peace 平和を願う私の顔」が開催されました。イラン系ドイツ人の写真家サイド、コルデュラ・ダツマルチアンが集めた写真のうち23作品が展示され、世界各国の個人の顔写真にそれぞれの世界平和への思いが添えられています。過去4年間、133カ国10000人以上の人々が参

加してきました。これらの顔写真とメッセージは同名の本として出版されています。



「平和を願う私の顔」展覧会  
テヘランピースミュージアムでの開会式

7月11日にはスザンナ・テルスタル オランダ大使が来館、1990年代に外交官になって間もないころにオランダ外務省の化学兵器会議準備会に関わっていたことを話されました。化学兵器禁止会議(OPCW)の支援国であるオランダや平和ミュージアムの仕事の重要性が議論されました。大使はTPMの活動を高く評価され、特に退役軍人、戦争被害者、ボランティアやアーティストの会合に触発され、今後のミュージアムとの連携に意欲を示されました。



テルスタル オランダ大使の来館

TPM と化学兵器被害者支援会議の代表が 8 月 6 日の広島平和祈念式典に参列しました。

2 つの組織に所属するイランイラク戦争の退役軍人と化学兵器被害者とアーティストが参加しました。化学兵器被害者は原爆被爆者や広島大学の学生に体験を語りました。代表団は広島市長で世界平和と市長会議代表の松井一実氏と面談、平和市長会議と TPM との今後の協力を求めました。



第71回広島平和祈念式典に参加したTPM代表団

8 月 24 日、25 日には TPM で「非暴力紛争解決と若者のリーダーシップ」と題するワークショップを開催、スイスとボスニア・ヘルツェゴビナから招かれた講師は紛争の悪化、悪化防止、対話などに焦点を当て、ロールプレイと双方向コミュニケーションで若いリーダーの技法と能力について講話しました。参加者はテヘランのさまざまな NGO スタッフや TPM のボランティアでした。TPM の活動の詳細はこちら [website](#) へ。

### ノーモアヒロシマ/ノーモアナガサキ 平和ミュージアムにおける展示会 インド

インド、ナグプールのノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキ平和ミュージアムは毎年の恒例となってい8月3

～6日の核兵器の危険性とその廃絶の必要性についての展示会を企画しました。この展示会は1,200人以上の女性が様々な学部で勉強している女性大学(the Women's College)で開催されました。



ノーモアヒロシマ・ノーモアナガサキ平和ミュージアム(インド、ナグプール)の展示会

学生だけでなく一般の人々も招待され21,000人以上の人がこの展示を見ました。この展示は非常に関心が高く、会期が数日延長されました。INMPの理事でありインド平和軍縮環境保護研究所(IIPDEF)所長で平和ミュージアム事務局長のバルクシュナ・クルベイ博士は高い評価を受けている二つの平和NGO団体、核戦争防止国際医師会議(IPPNW)と社会的責任を果たすための医師団(PSR)の研究に基づいて核兵器の使用の影響について講演しました。



核兵器の環境への影響について講義する  
バルクシュナ・クルベイ博士

インド・パキスタン間のいわゆる限定的核戦争でさえ20億人の人々の命を危険にさらし、その半分が餓死するであろうといわれています。隣り合う二国間の敵意や不信、それらの国の国民や政治家の核兵器の脅威に対する無知を考えれば、この情報をできるだけ広

く知らしめる必要があります。

### 「広島：重要な個人文書、発見される」

今年の初め、小倉桂子さんが夫の故、小倉馨さん(1920-1979)の日記や手紙を家で見つけました。500頁ものタイプされた原稿、メモ、そしてロベルト・ユンクとの800頁に及ぶ往復書簡が含まれていますが、すべて英語で記されていました。小倉氏はアメリカのシアトルで生まれましたが、後に広島に移り住みました。長年にわたり、ヒバクシャ(原爆の生存者)の証言の収集や記録に携わり、1970年8月～1972年11月まで、広島平和記念資料館の館長を務めた方です。

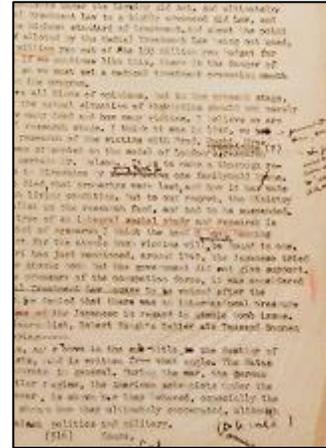
小倉氏は1977年7月～1979年11月には、広島平和文化センターの事務局長もされました。ヒバクシャの身体的、精神的、そして社会的な苦しみなど、広島のことを世界に伝えるのに大きな役割を果たされたのです。1950年～1960年代のヒバクシャとの会合やインタビューなどで、ロベルト・ユンク、ノーマン・カズンズ、ロバート・J・リフトンそしてバーバラ・レイノルズは、彼の助けや知識の恩恵を受けています。



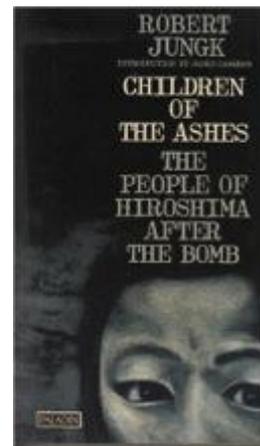
小倉馨さん

ユンクたちの記録、出版物、講演は、広島への癒えることのない傷について、初めて世に伝えたものでした。彼らの経験は、彼らの人生をも変えることになりました。以上のことはNHKの興味深く感動的なドキュメンタリ

番組となり、8月6日に世界放映されました。“My Small Steps from Hiroshima”(広島からの小さな歩み)という英語の50分のフィルムは、8月22日までウェブサイトで見聴可能になりました。



原稿の316頁



ロベルト・ユンクの『廃墟の光』



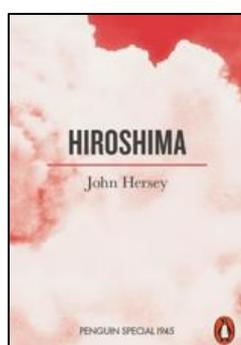
小倉桂子さんとインタビュアーのカリ・スタイナーさん

この番組には、小倉桂子さんも出演していますが、彼女は8歳の時に広島に居たヒバクシャで、広島のことを世界に伝えたいという夫の熱意を共有した方です。その思いを抱いて、彼女は1984年に「平和のためのヒロシマ通訳者グループ」(HIP)を立ち上げました。ボランティアのグループで、旅行者を英語で案内していますが、初め20人だったメンバーは160人に増えています。「小倉桂子の好奇心と共感力:広島原爆ヒバクシャの話」は、このサイトで読むことができます。

INMPは山根和代さんに、NHK映像や小倉夫人からの情報を知らせてくださったことを感謝しています。

### 「1946年『ザ・ニューヨーカー』誌 ジョン・ハーシーの記事を心に留めて」

1945年8月6日の原爆被害の初期報道で最も注目され、影響力が強かったものは、1年後の1946年8月31日に「ザ・ニューヨーカー」に載ったアメリカ人ジャーナリスト、ジョン・ハーシーによる長い記事でした。内密に制作されていたが、30,000字もの記事となりました。これは有名な週刊誌の歴史上、前例のないものでした。ハーシーは1946年5月に広島を訪れ、3週間滞在し、6人の生存者から聞き取りをして、その話を記事にしたのでした。



2015年8月6日の70年記念版「ヒロシマ」

欧米の人々が、都市の破壊と生存者の苦しみを、人間の話として知ったのはこれが初めてでした。この記事は大評判となり、すぐにアメリカやイギリスで50もの新聞や本に連載されることになりました。1946年8月31日の記事を読むことは、日本では1949年まで禁止されていましたが、1949年には6人の生存者の一人、谷本清牧師によって日本語に翻訳されました。

BBCは全記事を放映する許可を得て、1946年10月に4つの話に分けて放映しました。(数週間後には再放送)

ハーシーの「ヒロシマ」の70年記念として、BBCは(1946年以来初めて)2016年8月23日～26日に再放映することを決めました。「ザ・ニューヨーカー」は、2015年8月6日の広島への原爆投下70年を機に、歴史的な記事のすべてをオンラインに載せました。

雑誌のアーカイブ長、ジョシュア・ロズマンは「『ヒロシマ』の影響力は衰えていない」と記しています。

### 平和のための風刺漫画一十周年記念

「平和のための風刺漫画」は世界的な新聞漫画家のネットワークです。この組織は元国連事務総長コフィ・アナン氏とフランスのル・モンド紙の漫画編集者プラントゥ氏の呼びかけで世界的に著名な新聞漫画家12名のシンポジウムが開かれた際に設立されました。



これは2005年デンマークで起きたモハメッドの風刺漫画に対する暴力的事件のあと、2006年10月16日にニューヨーク国連本部で開かれました。ジュネーブの国連事務局、スイス外務省の支援で、平和のための風刺漫画スイス基金がジュネーブで発足(2006年、2009年)し、2008年にはパリのル・モンド社の本社でフランスでも同様な組織が誕生しました。

その第一回常設展覧会はフランス・ノルマンディのカーンにある平和祈念館で2010年に始まりました。最近では講演会やディベートなども加わり、「人権のための風刺漫画」がEUの後援を受け2015年12月15～16日に欧州議会議事堂で開催され、EU加盟国各国から28名の風刺漫画家が参加しました。2016年5月3日から6月4日にはジュネーブで世界報道の自由デーと同時に展覧会が開かれました。

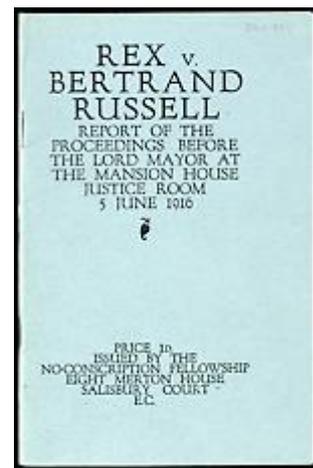


マリオ・ピアニ(イタリア)の風刺漫画ポスター

この大型の風刺漫画パネルの展覧会は、ジュネーブ湖畔で隔年に野外で行われます。「平和のための風刺漫画」は今年末に設立10周年を迎えます。組織の詳細や移動展、出版物などの情報はこちらへ。[here](#) リオ五輪セレクションやウェブ掲載作品の通り、風刺漫画は笑いと涙を誘います。

## 第一次世界大戦良心的兵役拒否者展 ロンドン・ナショナル・ポートレート・ ギャラリー

英国では2016年は徴兵開始百周年の年です。第一次世界大戦の初めに西部戦線で非常に多くの死者が出たため、英国軍は志願兵では足りなくなりました。1916年兵役法は未婚で健常な18歳から41歳の男性全てに従軍を命じました。倫理的宗教的理由での兵役拒否は非戦闘任務に、全ての軍務を拒否すれば投獄されました。多大な重圧にも拘わらず武器と戦闘を拒否した良心的兵役拒否者は非常に嫌われ侮蔑的に「コンチーズ」という新語で呼ばれました。一次大戦では英国で16000人の良心的兵役拒否者が記録されその多くがクエーカー教徒でした。



世界最大の肖像画を蔵するロンドンナショナルポートレートギャラリーでは、2016年6月21日から2017年2月5日まで100周年記念として控えめだが興味深い展示が開かれます。良心的兵役拒否者となった著名人で他の拒否者と共に投獄されたバートランド・ラッセルやフェンナー・ブロックウェイ、クリフォード・アレンの肖像画も展示されています。女性は徴兵されませんが、シルビア・パンクハーストやレディ・オトライン・モレルなどは良心的兵役拒否者を助けるために大きな役割を果たしました。

写真家でもあるレディ・オトラインは、(このギャラリーに約 4000 枚の彼女の写真からなる 12 部のアルバムが所蔵されています) 特別に展示されています。戦時中オックスフォード州の家を兵役拒否者の隠れ家とした際のレディ・オトラインの生活が記録されています。ブラッドフォードピースミュージアムにはめずらしい初期のコンチーの絵画が常設展示されています。

## 第 9 回

### 平和のための博物館国際ネットワーク会議 2017 年 4 月 10 日～13 日：ベルファスト

2017 年は INMP の 25 周年記念の年で、第 9 回 INMP 国際会議が北アイルランド (イギリス) のベルファストで 4 月 10 日から 13 日まで開かれます。

パネルや発表などどうぞふるってご参加下さい。発表者の申し込み締め切りは 11 月 30 日です。詳細は今後発表されます。

本会議の前に英国ブラッドフォードでプレ会議企画があります。ブラッドフォードには英国で唯一の平和ミュージアムがあり 1992 年の INMP 設立会議の開催地です。4 月 9 日、現地集合で、内容は以下のとおりです。

- ・ピースミュージアムの見学
- ・ブラッドフォードピーストレイルの一部を辿る
- ・第一回 INMP 会議開催地であったブラッドフォード大学の見学
- ・世界的に有名なブラッドフォード大学平和学部見学
- ・大学特別コレクションやコモンウェル(非暴力平和)図書館の平和記念物の見学

リーズブラッドフォード空港からは毎朝ベルファストへの便があります。本会議の始まる 10 日の朝の便でベルファストに向かうのがちょうどよいと思われます。

参加希望者はブラッドフォードピースミュージアムの代表・クライブ・バレット氏 [here](#) へ問い合わせください。詳しい情報はこちらへ [here](#)

※注：2016 年 11 月 16 日時点で、日本からの参加希望者が 20 名近くあります。日本からの参加者についてスムーズで有意義な参加となるよう、現在、山根和代・安齋育郎・谷川佳子が情報の収集などに当たっています。

## 編集ノート

編集委員メンバーは安齋育郎、ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン、ロバート・コワルチェック、山根和代です。翻訳は、谷川佳子さん、幾波素代さん、竹田敦子さん、寺沢京子さんが担当しました。

INMP の会員そしてニューズレターの読者のみなさん、随時ニュースなどの投稿をお願いします。原稿は随時、英語で 500 単語以内、写真は 1-3 枚。あなたの名前と所属を書いて、news@inmp.net に送付してください。英語で書くことに困難がある場合には、INMP 日本事務局 (安齋科学・平和事務所、電話：075-741-7267 〈月水金午後〉、FAX：075-741-7282) にご相談下さい。